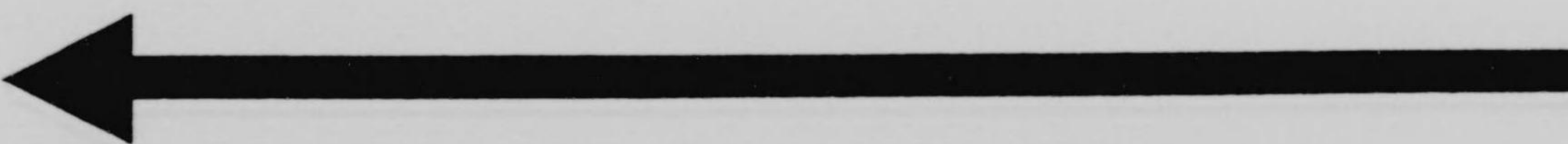


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

117
117
117

始



文 藝 座 臺 本

シエクスピア原作
林 和 改 修

ロミオとジュリエット

三幕十一場

(大正七年十一月下帝國劇場上演)

377-117

文 藝 座 本



シエクスピア原作
林和改修

オとジュリエット

三幕十一場

大正
7. 11. 29
内交

(大正七年十一月下帝國劇場上演)

世界的の大文豪として名を知られてゐる沙翁のロミオとジュリエットを上演するについて殆んど一座の俳優に渡す爲に此書を鉛型に附した。沙翁の原作を傷つける事が尠くないと同時に今度の上演に就て此處に改修の必要を餘義なくされる事を地下の沙翁に謝さなくてはならぬ又同時に立派な原作の儘の翻譯を出されてゐる恩師坪内博士と、日本で最初に現代語譯を試みられた久米正雄氏にも感謝と共に深くお詫びをしなければならぬ

大正七年十一月廿二日

文藝座

ロミオとジュリエット

登場人物

パリス	若き貴族	阪東三吉
キャピレット	エローナの長者	森英治郎
一老人	キャピレットの叔父	高木茂
ロミオ	モンタギュー長者の子息	守田勘彌
マアキシオ	領主の親戚、ロミオの友	林和
ベンヴェリオ	モンタギューの甥、ロミオの友	横川唯二
チツパルト	キャピレット夫人の甥	林幹
ローレンス	フランシス派の僧侶	加藤精一
バルセーザー	ロミオの家僕	阪東田三郎

サムソン	キャビレット家の家僕	高嶋素彦
グレゴリー	キャビレット家の下僕	高木茂
ピーター	モンタギュー家の家僕	阪東治郎
エブラハム	パリスの小姓	阪東彌助
侍	ズローナ市の	河添和利
警吏	キャビレット家の給仕人	大彌斗
給仕	キャビレットの妻	初瀬浪子
キャビレット夫人	キャビレットの娘	林千歳
ジュリエット	キャビレット家	藤間房子
乳母	ズローナ市民、夜會假裝者等大勢	

ロミオとジュリエット



(戀の曲終ると序詞役出で来る)

序詞役。舞臺は美しいズローナの市です。

そこで權勢相等的しい二名族が古い怨恨から更に生じた新らしい争のため
市民の鮮血が市民の手を汚すに至つたのです。

此の讐敵同志の不幸な胎内から、
不運の屋を荷うて二人の戀人が生れ出ました。
さうしてその冒險が憐れにも破れ果て、
彼等の死と共に親々の争ひをも埋めて了ひました。

この死の刻印を捺したやうな戀の履歴と、
子供達が非業の死を見る迄に、
如何にしても解け得なかつた親々の怨。

それはこれから二時間に陟つた私共の演劇です。
御心長く御覽せられさふらはど、
足らぬ所は相勵みて御覽に供します。

(序詞役入る)

第一幕

第一場 エローナ街上

(キャゼレット家の下人サムソンとグレゴリーとが劍と楯とを持ち出て来る)

サム。グレゴリー實のこつちや、誰れが炭奴の役なぞをするものかえ。

グレ。さうともくそんな役をする奴は役に立たずだ。

サム。だから予は腹を立てて抜かうといふんだ。

グレ。それでこそ生抜のエローナつ子だ。

サム。予が腹を立てたとなりや忽ち眞二つにしてくれる。

グレ。ところが、其立つまでが手間が取れよう。

サム。なアにモンタギューの飼犬を見ても腹が立つ

(と、此時モンタギュー家の下人エブラハムとバルセーザーと一方に出づ)

サム。さ、抜いたぞ、喧嘩を吹つかける、尻押をしてやる。

グレ。何だ！尻に帆を掛ける？

サム。心配するな。

グレ。何のおまへなんぞ。

サム。此方の理屈が立つ様に先方から發端させやう。

グレ。行違ふ途端に睨みつけて遣らう。

サム。うんにや予は指の爪を噛んでくれよう、それで黙つてゐりや恥さらした。(と、

双方行違ふサムソン指の爪を噛んで見せる)

エブラ。お前さんは指の爪を噛んでるんだね。

サム。如何にも爪をかんでゐます。

エブラ。吾等に向つて噛むんですね。

サム。(エブラに對つて)いゝやお前さん達に向つて噛みはしないが、只噛む。

グレ。喧嘩を吹掛けるんだな？

エブラ。喧嘩！うんや。

サム。喧嘩なら敵手にならう、お前達には負けんぞ。

バルセ。勝もしまい。

サム。むふ。………(と、詰る、此時上手よりモンタギューの親族ベンヴェオリオ出で

来る)

グレ。(サムソンに向ひ小聲にて)勝つと云へ！勝つと云へ！(下手を見やりて)あそこ

へ旦那の親類がやつて来た。

サム。うんにや、勝つわい。

バルセ。嘘を吐け。

サム。抜け男なら、グレゴリー、えいか頼むぞよ、しつかり。

(と、サムソンとエブラハムと劍を抜いて戦ふ。ベンヴェオリオ此の體を見て駆け來り劍を抜き割つて入る)

ベンヴェ。待つた！！藏めろ劍を、こゝな向不見が。

(と、キャピエレット長者の甥チツバルト下手より出で来る)

チツバ。やあ、下司下郎を敵手にして汝は劍を抜いたな？ベンヴェオリオ、こちを向け、命を取つてくれやう(と、劍を抜く)

ベンヴェ。いや和睦をさせたいためにしたんだ。劍をおさめて予と一所に引分ける手傳ひをして呉れ。

チツバ。何だ、抜いてゐながら和睦だ！俺は和睦といふ語は大嫌いだ、地獄ほどに、

モンタギューの奴等ほどに汝ほどに嫌ひだ、卑怯者め、覺悟しろ！(と、突いてかゝるベンヴェオリオ餘儀なく敵手になる。此の途端兩家の關係者双方より出で來り入亂れて戦ふ。市民及び警吏長等棍棒を携へて出で来る)

警吏長。棍棒組よ。鈍組よ！ 打て！打据えろ、キャピエレットを！、モンタギュー

一を打据えろ！(と皆々を追ひ上手に入る)

(と、キャピュレット長者寢巻のまゝにて其妻キャピュレット夫人は之れを止めつゝ出で来る)

キャ長。此の騒動は何事だ？やあ〜予の長い劍を持て、長い劍を。

キャ妻。杖ですよ、杖ですよ！何で長い劍を？

キャ長。えい、劍ちやといふに(上手へ思ひ入れあつて)見いあれを、モンタギューの長者めが來をつて予に見よがしに刃を揮つてゐる

キャ妻。まあ〜、まあ〜(と、止め後から上手に入るワアツといふ哄聲起る)

(哄聲遠のくと共にベンウリオ上手より來りロミオ下手より近づく)

ベンウ。や、お早う。

ロミオ。まだ其處に早いのかね？

ベンウ。今九時を打つたばかりだ、

ロミオ。あ〜〜！味氣ない時間は長い。

ベンウ。さて如何な味氣ない事があつてロミオには時を長いと仰有る？

ロミオ。得れば時が短くなる、其物が得られぬからだ。

ベンウ。戀だな？

ロミオ。いや戀を……。

ベンウ。失戀でもしたのかね。

ロミオ。或女から拒まれたのだ。

ベンウ。おや〜戀つて奴は見掛けによらない荒い事をやるもんだなあ。

ロミオ。本統だ、あの戀つて奴は始終目隠をしてゐるが目無しで自分の心の儘に道をつけるものだ……何處かで食事をしやうか……こりやまあ何といふ騒動だ。だが其譯はもう全然知つてゐる。これには憎み合ふ譯も澤山あるがまたそれ以上に愛する譯もあるのだ。云つて見れば憎み合ふ愛だ。愛し合ふ憎さだ。無から出た有だ沈める氣樂さ、眞面目な虚榮心、冷めたい火、病める健康いつもさめてる眠り現在ある物と同じではない物だ！ま恰度然うした切な戀を感じてゐ

るがさればと云つてこれで戀を感じたといふ事もない……君は何で笑ふのだ？

+

ベンヴ。笑ふ所か泣いてゐるんだ。

ロミオ。それは又何を悲しんで？

ベンヴ。君の心中の苦痛を察してさ。

ロミオ。それこそ深切過ぎて却つて迷惑だ、自分の悲嘆だけでももう胸が一杯なのに、その上君が泣いてくれると益々胸が迫つてくる、君の同情は只さへ多い私の嘆きを増すばかりなんだ。戀といふのは嘆息の氣と共に騰ぼる煙だ、發しては戀人の眼に火と輝き、凝つては戀人の涙となつて海の水量を増す。もしさうでなければ何だ……正氣の氣狂ひだ。喉がつまる程の苦味と命がのびるやうな甘味とを兼ね備へてゐるものだ。左様なら。

ベンヴ。まつた！一緒に行かう、私を置いてきばりにするのは酷いよ。

ロミオ。ところが私は自分をも置いてきばりにして了つた、私は此處にはゐない、こ

れはロミオでなくてロミオはどこか外にゐるんだ。

ベンヴ。まあ眞面目に白狀して呉れ給へ。君の戀したと云ふのは一體誰だね。

ロミオ。え、ちや僕は死ぬ苦みをして君に話さなくちやならないのかね。

ベンヴ。死ぬ苦みだつて、馬鹿を云ひ給ふな、だがてきばきと話して呉れ給へよ。

ロミオ。さうてきばきと病人に遺言狀を書かせようといつても無理だ、あくそんな言

葉は聞くのも厭だがねえ、實は僕ある女を戀したんだ。

ベンヴ。戀と睨んだ時にその位の當りはつけて置いた。

ロミオ。すばらしい當りの名人だな。そして僕のは目に立つやうな美人なんだ。

ベンヴ。目に立つやうななら、すぐにも射落せるだらう。

ロミオ。處がその矢は外れてゐる。彼女はキュービッドの矢でも射落す事ができない愛の言葉の包圍攻撃にも、鋭い流石の遭遇戦にも決して心を動かさないし、又聖人をも墮落させるといふ黄金に前垂をひろげる事もない。あのやうに美しさに富んでゐ乍ら、自分の死ぬと一緒に其種をも残すまいといふのは、求めて美

を乏しくするといふものだなあ。

ベンウ。そんな女はどこまでも獨身で立通さうと誓つたのかね。

ロミオ。さうだ。さうして其美を惜むのが莫大な損失を來すのだ。見給へ折角の美しさも情のこはいために飢死して、子孫に傳へることが出来ないぢやないか。あの女は美し過ぎ、賢過ぎ、賢くも美し過ぎて、僕を失望の淵に沈めたから、天罰で税福を得る譯にはゆくまいよ。彼女は戀をしないと誓つた。そして其誓のために、僕は今物を云うては居るが、其實生きながら死んでゐるんだ。

ベンウ。僕の云ふ通りに従つて女のことは忘れ給へ。

ロミオ。ぢやどうしたら忘れられるか教へて呉れ給へ。

ベンウ。目にもつと自由を與へて、他の美人を見給へ。

ロミオ。それはかへつてあの絶世の美を思ひ出させる種となるだらう。美人の額に接吻する幸福な假面は、黒いけれどもその陰にかくす美しい貌を思ひ出させる目を潰されても一度見た目の財寶は忘れる事が出来ない。どんな拔群な美人を見せ

て呉れたつて、其美の役立つ處は只、其拔群な美を抜く拔群な美人を思ひ出す覚え帳たるに過ぎない。左様なら。君は僕に忘れる法を教へる事はできないよ。ベンウ。いつかは教へてあげられる。僕もそいつを拂つてしまはないと負債のあるまゝで死ぬことになるからな。

(と話しながらロミオとベンウ二人入りかゝる。下僕登場。)

下僕。此處に書いてある人を見つけろ！へん。靴屋は指尺で稼げか、仕立屋は足型で漁師は筆で、書家は網で稼げとでも書いてあるんだらう。處が俺は此處に書いてある人達を探して來いと命つかつた、がどんな名が書いてあるんだか解らないと來た。こいつあ一つ學者のそこへ行つて……(行違つて)やあうまい時でつくわしたぞ。御免下さいまし。妙なことを伺ひますが旦那はお読みなさることができませうか。

ロミオ。うむ。不幸にあつて此方の運命を読むことも出来るよ。

下僕。それならば本がなくとも讀ませうか、私はあなたの御覽になるものが讀める

かどうかをお聞きするのです。

ロミオ。うむ。字と言葉がわかりさへすればなあ……

下僕。正直な事を仰しいます。では左様なら。と行きかゝる。

ロミオ。おい待て、予は讀めるぞ。(と呼止め讀む。マーチノ殿及び令嬢達、アンセルム伯並に美しき御令妹達、グイッルウイオ未亡人。ブラセンシオ殿及び愛らしき姫達。マアキユシオ及び弟ウアレンタイン。叔父キャビユレット夫妻及び令嬢達。美しき姪ロザリン。リウイア。ウアレンシオ殿。及び其甥チツバルト。ルシオ並に快活なるヘレナ……美人の集りだ。どこへ此人達は寄るんだな。

下僕。え……あの……

ロミオ。何處だ。夜會にか。

下僕。手前方へ。

ロミオ。手前の方とは？

下僕。主人の邸へで御座います

ロミオ。そこだ、それを真先に聞くんだつた。

下僕。御きよなさらすとも申し上げませう。私の主人は大富豪キャビユレットで御座います。もしあなた方がモンタギュー家の者でなかつたら、どうぞ來て杯をお取りなさいまし。では御免を蒙ります。(下僕退場)

ベンヴ。此キャビユレットが昔ながらの宴會に君が戀ひ慕ふロザリンがウエローナで評判のあらゆる美人たちと會食するとは聞耳だ。そこへ行つて眩まぬ眼で僕が見せてやる誰かと比べて見給へ。さうすれば僕は今迄君が白鳥だと思つてゐた人を鴉にして見せるよ。

ロミオ。我が眼の奉ずる宗教が、もしそのやうな不信を許すなら、涙が火に變つてもいと。さうして度々溺れた癖に死にもしなかつた此透명한異教徒が嘘つきの咎で焼かれて了へ。俺の戀人よりも美しい人が居るんだつて！すべてを見通す太陽でも開闢以來彼女と肩を並べる女は見たことがないんだ。

ベンヴ。まあ、傍に誰もゐないで、どつちの眼でもロザリンばかりを見てゐた時は、

美しいとも見ただらうが、君が其水晶の秤量皿はかりざらに、今夜宴會で僕の見せる輝くやうな女をのせて君の戀人の重さと比べたら、其時こそ一番美しく見へる女が美しさを減するだらう。

ロミオ。そんなものを見たくはないが、僕は僕の美しさを楽しむために、兎に角一緒に行くでしょう。(兩人退場)

第一幕

第二場。キャピュレット邸の一室

(正面奥に舞踏室を見たる控室。幕開くと給使人等拭布ナゲキをもちて入り来る)

給仕一。ポトバンは何處にある。片附けの手傳ひをしないのか。

給仕二。かう膳部一切を一人や二人の洗ひもせぬ手でやつて了はなくちやならんとはけしからんことだ。

給仕一。さあ疊椅子をあつちへやつて膳棚を運ぶんだせ。早く来い。おいアントニーポトバン。

給仕三。おい来た。(と入り来る。)

給仕一。お前を大廣間で呼んだせ、探してたせ、たすね廻つてたせ。

給仕三。さうあつちにもこつちにも居ることは出来ねえや。さあさあ、もう少し働いた働いた。働いて長生すれあ末は長者だ。(と去る)

(キャピュレット長者、ジュリエット及び一家の人々を引きつれて登場、客人及び假裝者等に挨拶する。)

キャピュ。ロミオの一群に)。皆さんようこそ御いで下さつた。踵かかとに肉刺こまの出来てない御婦人たちは喜んであなた方の舞踏對手セトリをつとめませう。あはははお嬢さんたちあなたの方の中で踊らないと仰る方がありませんかな。そんな上品振つたお方はきつと肉刺こまが出来てるんだ。さあどうです當らずとも遠からずでせう。(ロミオ等に向ひ)。能うこそいらつしやいました。皆さん。俺わしも嘗つては假面をかぶつて美人の耳へ好かれさうな話をささやいたこともありますが、それも遠い／＼

遠い昔となりましたよ。いやほんとによくおいで下さいました。(正面奥に向ひ)
 樂人たちが始めた。さあ皆さんあちらへ——舞踏室へ——。

(樂は奏せられ人々は舞踏室に入り踊る。やがてキャピユレット舞踏室より半身を現はし)

キャピユ。もつと燈火だ。家來共。爐の火を消せ。室が餘り熱くなり過ぎるやうだ。
 (と出で来り。) あゝ、これは思ひがけぬ好い慰樂だつた。まあ、お坐りなさい叔父さん。お互にもう舞踏する時代は通り過ぎて終ひましたな。あなたとわたしとが此前に假面をつけてからもう何年になりませうか。

叔父。大丈夫三十年だ。

キャピユ。何、それ程ではない。リュセンシオ婚禮以來だから、どんなに早くペンテコ
 ストの祭日がやつて来たつてまあ二十五年——あの時假面をつけたのだつた。
 叔父。もつとだよ。もつとになるよ。あれの子はもつと年をとつてゐる。もう三
 十だ。

キャピユ。確かに然うですか。あの件はつい二年前まで後見人がついてゐましたぞ。

(ロミオ假面のまゝ入り来る。給使人に向つて。)

ロミオ。あすこの騎士の手をとつていらつしやるのは何と云ふ令嬢だね。

給仕。私は存じませぬ。

ロミオ。おゝあの人の美しさは然らでも明るい燭火に光輝を添へてゐる。まるで寶玉
 のやうだ……此踊りが一通り済んだら俺はあの女の居所に目をつけ、握手を
 乞うて……俺の心は今まで戀をしたか。しなかつたと誓へ。眼よ。俺は今夜
 といふ今夜まで眞の美人を見なかつたのだぞ。

チツバル。おや。あの聲はモンタギュー家の奴に違ひないぞ。俺の細い劍を持つて來
 い。何をしに此處へ來やがつたか。道化面に顔をかくして此の税典を愚弄した
 り嘲笑するつもりだな。なあに俺は此一族の先祖と名譽とによつて彼奴叩き殺
 しても罪とは思はないんだ。

キャピユ。どうしたんだ甥よ。何だつてさう教團くんた。

チツバル。叔父上。あれはモンタギュー家の者です。吾々の敵です。今夜の盛典を嘲笑ふために、憚りもなく此處へ來やがつた悪黨です。

キヤビユ。年若のロミオじやないか。

チツバル。さうです。そのロミオ奴です。

キヤビユ。勘辨して見のがしておやりなさい。柔しい甥よ、あれは立派な紳士の振舞をしてゐるじやないか。その上、實を云ふとヴェローナが日頃徳もあれば行儀もいゝ青年だと矜つてゐる程の彼だ。わしは全市の富に換えても我が家で彼を侮辱したくはない。だから勘忍して彼に氣を留めぬがいゝそれがわしの意志だ。それをおまへが尊重して呉るなら、顔色をうるはしくして、その懇め面は止めて呉ろよ。饗宴には似合はしくない貌ぢやないか。

チツバル。いやあんな悪黨が客なんなら、丁度よく似合ひますよ。僕は逆も赦しちや置けないんです。

キヤビユ。赦して置きなさい。どうしたんだ。え、置きなさいと言ふに、これさ。此

處の主人はわしぢやないか、これさ。どうしても勘辨できない？ 飛んでもないことだ。おまへは來賓中に大喧嘩を起こさうと云ふのか。大争動を初める氣か。おまへはそんな男なんだな。

チツバル。でも叔父上。家の恥ですから。

キヤビユ。よろしい、いゝつと云ふことよ。こんな事をしちあ却つて身を害なふぢやないか。まだわしに逆らうのだな。分からん男だ。はて大切な時だ。うまいぞいゝ皆さん。向ふ見すにも程がある。いゝいゝ。靜かにしないと……おいゝもつと燈火を持つて來い燈火を……如何したものだ。是非とも靜かにして貰はふ。さあ皆さんもつと陽氣に。

チツバル。無理往生の勘忍と持前の疳癩との出會頭で、俺の肉が顛へるわ。引き下らう。が今こそ甘く見へてゐるうぬが、今夜の闖入をやがて辛い味にかへてやるぞ。

(とキヤビユレット、チツバルトをおさへて入る。)

ロミオ。(ジュリエットに近づき)此賤しい手で聖い御堂を汚したのが罪ならば面を赤らめた二人の巡禮が優しい接吻を以つて粗い手の觸れた處を滑かに淨めませう。

ジュリ。まア巡禮さん、作法によく合うた、御信仰ですのに、其様におしやつてはそのお手にお氣の毒です。聖者方にも御手はある、その尊手に觸れるのが、巡禮の接吻禮とやら申します。

ロミオ。では聖者には唇が無いのでせうか、それから巡禮にも……。

ジュリ。さあ、けれどもそれはお祈願に用ふる習ひですもの。
ロミオ。おふ、それならば、我聖者よ。手の爲す所爲を唇にも爲させ給へ。唇めが祈ります。聽して下さい、さもなければ信心が失望となります。

ジュリ。切なる祈願の心は酌んでも、聖者の心は動きません。

ロミオ。それならば、お動きなさるな。私が祈願の報を賜はります。(と接吻する)。
(乳母出で来る。)

乳母。嬢さま、お話しがありますと、お母さまが。

ロミオ。あの方のお母様とは何誰だね?

乳母。まああなた。あの方のお母様とは此邸の奥様ですよ。ほんとに好いお人で賢い貞操のある方ですよ。私は今あなたがお話をしてゐなすつたお嬢様をお育て申しました。だからねえあなた様。あの子を手に入れたお方はたんとお寶にもありつきますよ。

ロミオ。キャピユレットの女かおふ何といふ話だ。これあ俺の命は敵からの借物だぞ。ベンヴ。もう歸らう。樂ももう頂點だ。

ロミオ。うむ。俺もさう思ふ。(獨語のやうに)あゝそれだからこそ心が不安なのだキャピユ。いや。皆さん。まだ歸り仕度をなさいますな。これからまだお粗末でも一獻差し上げたいと思ひますから。(皆々代るく長者に近づきて小聲に挨拶して歸り行く)……でござるか?では……何れも忝なうござつた。かたじけなう。や機嫌よう。

(一同次第に入る。)

ジュリ。乳母や、こゝへお出で。あの方は誰れ？

乳母。タイピリオ様のお嗣子でございます。

ジュリ。今戸口から出てゆく方は？

乳母。きつとペトルチオの若様でございますよ。

ジュリ。あれは誰れ？後から行く……踊らなかつた人は？

乳母。私も存じせんね。

ジュリ。さ、聞いてお出で……もし結婚して了つておいでなら、妾の新床はお墓なのだ。

(乳母戻り来る)

乳母。ロミオと言つて、お邸とは敵どうしのモンタギュー家の若さんですとさ。

ジュリ。(獨語のやうに)類無い戀が、類ない憎怨から生れやうとは！知らずに見知りあ

つて、今更知れてももう晚い。因果なあさましい戀だ。憎い／＼敵を愛さなく

ちやならないとは。

乳母。え、何ちやいな。それは？何を言つてお出でです？

ジュリ。歌よ……今しがた一しよに舞踏つた方に教へて貰つた歌なの。(奥にて「ジ

ユリエット」と呼ぶ。)

乳母。はい／＼、只今！さア参りませう。お客様は皆もう歸つてお了ひになりました

——ジュリエットを促して入る。

幕

第一幕

第三場。エローナ街上。

(ローレンス法師籠を携へて出でくる。)

法師。灰色の眼をした暁が眉を顰めてゐる夜に向つて微笑むと、光りの縞が東方の雲を彩り、何時ともなく夜の暗がよろめき去る。どれ太陽が昨夜の露を乾かす前に、毒のある草や貴い液を出す花などを摘んで、この籠を満たさう。

(ロミオ入り来る。)

ロミオ。お早うございます。

法師。よう。誰だな。若い癖に早起きは心に煩悶のある證據だ。おまへの早いのは何かの煩悶で早起きしたのだとわたしに思はれたのだ。さでないとする、ロミオは昨夜は床に就かなかつたのだな。

ロミオ。その通りです。寝るよりもつと嬉しい休らひを私はしたのです。

法師。神よ許し給へ。ではロザリンと一緒だな。

ロミオ。ロザリンとですつて。いふえ。その名も、名に伴ふ悲痛も皆んな忘れて了ひました。

法師。それでこそ好い子だ。だがそれちや一體どこにゐたんだ。

ロミオ。聞かなくてもお話しませう。私は敵の家の宴會に行つたのです。するとそこで突然私に傷を負はした人があつて、私も其人に傷を負はせました。私共兩人の創薬はあなたの御助力と尊い御處方にあるのです。私は其の敵を憎みなんぞ

致しません。かうして頼みに來たのも矢張其敵の爲を思ふからなのです。

法師。はつきりと意のあるところを素直に言ひなさい。懺悔が謎のやうなら、赦免も謎のやうになるのだから。

ロミオ。でははつきり申しますが、私の心からなる戀は富めるキャピレットの美しい娘の上に置かれたのです。そして娘も私の上に……。すべてのことは取結ばれて残つてゐるのはあなたが取結んで下さる神聖なる結婚式だけです。何時、何處で、どうして吾々が會ひ、どうして言寄り、どんな誓をかはしたかは歩き乍らお話しませう。だがこればかりはお願ひします。どうか今日婚禮する事を承知して下さい。

法師。天にいます聖フランシス！ これは何といふ變りやうだ。あれほど戀ひ慕つたロザリンをもう棄て了つたのか。若者の戀といふのはほんとに其心にあるのでなくて、眼にあるものと見える。御覽！おまへの頬の上にはまだ昨日の涙が拭はれずに残つてゐる。その悲嘆は皆んなロザリンのためであつたのに。そんな

なら其心が變つたのか。ではこの文句をお云ひない。女は心の移る筈。男さへ堅固にあらず、と。

ロミオ。あなたはロザリンに戀するなど幾度もお叱りなすつた。

法師。戀するなど云つたのではない。溺れるなど云つたのだ。

ロミオ。そして戀を葬れと仰つた。

法師。一つを墓に埋めて新しいのを掘出せとは云ひはしない。

ロミオ。どうぞお叱りなさいますな。今戀してる女は此方で思へば彼方でも思ひ、此方で慕へば彼方でも慕ふのです。先のはさうでありませんでした。

法師。おゝそれは先の女がおまへの戀を、口先だけのものと思つてゐた爲でもあらうだが來なさい。わしと一緒に來なさい。考へがあるから助力しよう。といふのは此縁組が原因で幸にも後々には兩家の怨みを純い愛にかへるかもしれないぬからな。

ロミオ。おゝ。だから私は急いでゐるんですよ。

法師。賢くゆつくりしなくちやいけない。急いで走る奴は躓くものだ。

(兩人退場。)

(ベンヴェオリオとマアキユシオと出てくる。)

マアキユ。ロミオの奴どこへ行つたんだらう。昨夜は家へ歸らなかつたかい。

ベンヴェ。うむ、お父さん家へは。あの下僕にあつて聞いた。

マアキユ。あゝ、ではあの青白い情なし女のロザリンめにいじめられて、はては狂人にもなりかねないね。

ベンヴェ。キャビユレットの親類のチツバルトが、ロミオのお父さんへ宛て手紙を送つ

たさうだ。

マアキユ。きつと決闘狀に違ひない。

ベンヴェ。ロミオが返事をするだらう。

マアキユ。字が書ける者なら誰だつて返事をするだらうさ。

ベンヴェ。いや。しかけられたからは立合はう返事をするだらうさ。

マアキユ。あゝ、ロミオの奴め、奴はもう死んでるわい。あの白い女つ子の黒い眼で刺し殺されてるんだ。耳は戀歌で射透される、心臓の眞只中は例の盲子僧の稽古矢で打裂かれる。何うしてチツバルトに立向ふことが出来るものか。

ベンヴ。ええ。どんな男だね。チツバルトは。

マアキユ。昔嘶にある猫の王のチツバルトよりは上だと云へよう。あれはほんとに武士の作法を心得た雄々しい達人なんだ。彼は譜を見て歌を歌ふやうに、時と距離と釣合とを間違へずに闘つて、一、二、と間を置いて、三といふ途端に相手の胸元へズブリ！、絹鈕をも芋刺にせうと云ふ決闘師なんだ。それも第一條第二條を云々する決闘師の嫡々だ。其手の中と云つたら先づ百發百中の進み突きとござい。次に逆衝き。參つた突きとござる。

ベンヴ。何だいそれは。

マアキユ。かうした奇怪な舌たらずのコケおどしを云ふ空想つて奴が疫病の様に流行るのさ。新しい言葉の抑揚で話す奴なんだよ。二言目には神かけて立派な丈夫

だ。へん立派な助平が聞いてあきれ。どうだいお祖父さん。情ない世の中となつたぢやないか、吾々はこんな妙ちきりんな蠅どもに惱まされるとは。おゝ又してもぼん／＼ぶん／＼。

(ロミオ入り来る)

ベンヴ。ロミオが来たロミオが来た。

マアキユ。鯛を抜かれた鯡の干物のやうだ。おゝにしは／＼、でもまあ淺間しい魚類とはおなりなすつたね、いやロミオの君。エヘンボンジュー。これは君の佛蘭西式の細ズボンに對する佛蘭西式御挨拶だ。ゆふべは能くも僕等にまんまと贖金をつかませたね。

ロミオ。兩人ともお早う。贖金とは何だい。

マアキユ。出し抜いてさ。白ばくれちやいけないよ。

ロミオ。勘辨して呉れ。マアキユシオ。大きな事があつたんだ。あのやうな場合にはつい禮を曲げることもあるさ。

マアキユ。ふん、あのやうな場合にはつい腰を曲げるつてでもいふのだらう。
ロミオ。といふのは禮儀正しくするつもりですかい。

マアキユ。いや。こんな馬鹿らしい競走は止めた。何故つて君ははじめからぬけてるんだからな。どうだ圖抜けた洒落だらう。

ロミオ。成程間抜けた洒落にかけちやあ君はもとから圖抜けてるよ。

マアキユ。そんな洒落を云ふと耳朶へ噛みつくよ。

ロミオ。いや。「噛んで呉るな阿呆鳥どのよ」だ。

マアキユ。君の洒落は橙酢といふ格だね。ソースにつかつたら酸っぱからう。

ロミオ。だから君のやうな味のぬけた代物にかけると効くんだ。

マアキユ。おや〜。君の口はメリヤス製だね。寸から尺へ伸びる。

ロミオ。伸びるつて云へば君の鼻の下だ。これこそ天下無敵といふ伸びかたをするよ。おや面白いものが来るせ。

(乳母とピーターと出で来る)

マアキユ。船だ船だ。

ベンヴ。二艘二艘。雄と雌だ。

乳母。ピーター。

ピーター。はい〜。

乳母。私の扇子を。

マアキユ。ピーター君、顔を隠さうといふんだ。成程扇子の方が餘程綺麗だ。

乳母。殿方、お早うございます。

マアキユ。御婦人。お晩うございます。

乳母。ええ、晩うございますかい。

ロミオ。御婦人。これは事壞しのために神様がお造りになつた男だよ。

乳母。事壞しのために出来たお人とは、ほんとにうまいことを仰いますね。あの皆さん。ロミオの若様には何處へゐたら會はれませうか。御存じなら教へて下さい。

ロミオ。僕が教へてやらう。僕が一番年の若いロミオだ。さしあつてこの品よりま

づいのではない。

乳母。ほんにうまいことを仰有います。

マアキユ。それこそうまい意味の取りやうだ。賢女賢女。

乳母。あなたがロミオさまなら、私は少々御密談をお願いしたいのですが。

ベンヴ。(笑つて)この婦人は今に優待しいふつもりで誘惑をしかねまい、ロミオお父さんの邸へ歸らないか。あそこで晝飯をやらう。

ロミオ。あとから行くよ。

マアキユ。左様なら、昔のお嬢さん。左様なら。(歌をうたつて)

(歌ふ。)やんれ、徴の生えた雌兎く

レント祭には相應なれど、

徴びた兎ちや二十人も食へぬ、

食はぬうちから徴びたと聞けば……………。

(マアキユシオとベンヴオリオと退場)

乳母。まあ何といふ無禮なお若い衆で御座いませう。悪口ばかり云つて。

ロミオ。あれは喋るのが好きな方々だ。そして一日中に聞くよりも一分間に喋る方がずつと多いのだ。

乳母。私の事をかれこれ云つて見るがいく、ろくでなしめ。あたしはあの人たちに馬鹿にされるやうな女ぢやないんだよ。あんな無頼仲間ぢやないんだよ。お前は傍に立つてゐ乍ら、私がいづらの慰みものにされてゐるのを黙つてゐるんだね。

ピーター。誰もおまへさんを慰みものにはしないよ。もしそんな事があれば此の利劍はとうに抜きはなつてある筈だ。俺だつて相當の喧嘩でもあつて、此方の理窟が立つとすれあ、他人に敗けることぢやない。

乳母。もうほんとにく口惜しくつてわたしや身體中がふるふるよ。ろくでなしめ。

(ロミオに向ひ)。どうぞねえ、あなた。さつき申し上げたやうに、私の嬢様があなたを捜して来いとお吩咐でしたが、まあそんなことは後にして、真先に私が

云はなくちやならないのは、お嬢さんは年齒がゆかないんですし、それであな
たがお騙しでもなさるお心算なら、ほんとにいけないことですよ。女の人にそ
んな事をなさつては卑怯ですよ。

ロミオ。乳母さんおまへのお嬢さんに宜しく云つてお呉れ。僕はどこまでも誓ふが……

乳母。まあお人の好い……その通り申しますとも。ほんとに、お嬢さまはどんなに
お喜でせう。

ロミオ。何を其通り云ふんだい。まだ僕から何も聞かないぢやないか。

乳母。あなたがどこまでも誓ふと仰有つた事を申すのですよ。それがほんとに紳士ら
しいお言傳でございますがな。

ロミオ。お嬢さんに勸めて、此午後どうかして懺悔式に来るやうに云つてお呉れ。そ
うすればローレンス法師の僧房で式を済まして婚禮しよう。これはおまへさん
の骨折賃だ。

乳母。いえ、どういたしまして。一文だつて頂きませぬ。

ロミオ。まあさう云はずに取つてお置き。

乳母。では今日の午後に？む、む、然ういたしましよ。

ロミオ。それからね、寺の塀外で待つてゐな。その時までには私の下男と一緒にやつて
繩梯子のやうに編んだものを持たせてやらう。左様なら、お嬢さんに宜しく云つ
てお呉れ。

乳母。御機嫌宜しう。あ、もしくあなた。

ロミオ。え、何か云つたか。

乳母。あなたの下男さんは口の堅い人ですかえ。「二人きりの秘密は洩れぬ、三人目が
居らねば」と申すぢや御座いませんか。

ロミオ。大丈夫鋼鐵のやうに堅い男だ。では呉々も宜しう。

乳母。宜しうございます。お嬢様はほんとに可愛らしい方で……ほんとでございま
すよ。ほんとにお稚かつた時といつたら……さうく、町の貴族にパリスとい

ふ方がございましてね、それはく御熱心なんでございますよだけれどお嬢様は蟪蛄を見る方がよつほどいとつて仰有いますの……

ロミオ。あの人に宜しう云うてお呉れ。

乳母。はいく申ませうとも。(ロミオ去る) ビーター。

ビーター。只今。

乳母。先きへ——そしてとつと(兩人退場)。

第一幕

第四場。ローレンス法師の書齋

(ローレンス法師とロミオと入り来る。)

法師。天よ。願はくばこの神聖なる式をお悦びになつて、後日悲しを以つて罰するやうな事のないやうに。

ロミオ。アーメン。アーメン。併しどんな悲が来ようと、ジュリエットの顔を一目見る悦びに替へられませうか。あなたが神聖な言葉で二人の手を結び合して下さい

れば、戀を殺す死の爲にどんなにならうとかまひません。私は我が妻と呼ぶことさへ出来れば満足です。

法師。そのやうな激しい悦びは激しい終焉をつげるものだ。だから戀も程よく。程よい戀は長く續くものだ。(ジュリエット入り来る。)あゝ嬢さんが見えた。あの様に戀する人の軽い足では、いつまで踏んでも堅い敷石は減りはしまい。

ジュリ。御機嫌よう御座います。

法師。その禮はロミオの口で二人分云はせよう。

ジュリ。ちやロミオさまにも……でないとお禮の方が過ぎませう。

ロミオ。あゝジュリエット。おまへの悦びがわたしのと同じやうに胸に満ちて、しかもそれを表はす術がわたしより巧みであるなら、そのおまへの息で四邊の空気も和ぐやうに二人が、今日の出會を祝福して下さい。

ジュリ。内容の十分な思ひは、言葉の花で飾るには及びません。自分の富を數へらるるのは貧しい人ばかりですわ。わたしの眞實は澤山で澤山で、半分だけでも數へ

ることが出来ません。

四十

法師。さあわしと一緒においでなさい。速く済まして了はう。神聖なる教會があなた方二人を一つに合體させない中は、さうさしむかひでゐてはならないのだから
(皆々退場)

——第一幕終り——

第二幕

第一場、エローナ。他の街上。

(マアキユシオ、ベンヴオリオ、扈童下僕をつれて登場)

ベンヴ。マアキユシオ君、もう歸らう。日は暑いし、キャビユレットの奴等に出會した。だが最後一喧嘩しなくちやなるまい。こんな暑い日にはよく狂つた血が騒ぐもんだからな。

マアキユ。酒屋に入った當座には、劍を卓の上に叩きつけて、「神よ願はくば汝に必要あらしめ給ふな」と云ふ口の下から、二杯目の酒が廻つてくると、何の必要も

ないのに給仕を相手に引きぬくつていふ手合は君だ。

ベンヴ。俺がそんな手合か。

マアキユ。さうともさ。君は伊太利中で誰にも負けない怒り蟲だ。直に怒るやうに仕向けられる。仕向けられると直ぐに怒る。

ベンヴ。さうして何うする？

マアキユ。君のやうなのが二人居たら、お互に殺し合ふので一人も居なくなるだらうなあに、君は聲が多いか少ないかで人と喧嘩をする。それから君は街中で喧嘩をして飼犬の日向ぼこを驚かしたといつては喧嘩をし、それから又新しい靴に古い紐をつけたといつては争つたぢやないか。その癖君は僕に喧嘩をするなど意見するのかい。

ベンヴ。僕が君程に喧嘩好きだつたら、ろはで此生命を一時間位賣つてもいよ。

マアキユ。ろはで！おろはは、、、。

ベンヴ。やあキャビユレットがやつて來たぜ。

四十一

マアキユ。ふん、かまふもんかい。

(チツバルト及び其他の人々入り来る)

チツバルト。俺にしつかりくつついて来い。奴等に文句を云つてやらう。諸君。今日は。どなたかに一言申したいことがあるんですが。

マアキユ。たつた一言？何かお添えなさい。一言兼一撃とでもしたら何うです。

チツバルト。うむ、機會さへ呉れば、いつでもお相手になりませう。

マアキユ。此方から上げなければ機會ができないと仰有るか。

チツバルト。マアキユシオ。おまへはいつもあのロミオと調子を合はして……。

マアキユ。調子を合はす！俺を樂人扱ひにするんだな。おまへが僕等を樂人扱ひにしたところが噪々しいばかりだらう。さあこの劔が俺の胡弓だ。今におまへを踊らせてやらう。畜生、調子を合はす。

ベンウ。こゝは往來だ。どこか私やかなところで、冷靜に談判するか、でなければ別れた方がいゝ。皆が見てゐるぜ。

マアキユ。見るために眼があるんだから、見させて置け、他人がどう思つたつてかまはないんだ俺は。

(ロミオ出で来る)。

チツバルト。うむ。おまへとは和睦だ。あそこへ奴が来た。

マアキユ。なんだ奴とは？あれがおまへの給服を着てるんなら、俺は首を縊られらあ。

さあ、決闘場へ行け。ロミオもお伴をするだらう。その意味なら奴と云つたつてかまはないさ。

チツバルト。ロミオ。おまへに對する憎さはこれつきりしか云へないぞ——貴様は悪黨だ。

ロミオ。チツバルト。おまへを愛する理由があるんで、怒らなくちやならない。その挨拶も悪くは取らない。俺は悪黨じゃない。だから別れるとしよう。おまへには僕が解らないんだ。

チツバルト。小僧。それが俺に加へた無禮の云譯にはならないぞ。だから向きなほつ

て抜け。

四十四

ロミオ。僕は無禮を加へた覚えがない。それ所かその譯が判らなければ合點の行かぬおまへを愛してゐるのだ。だからなキャビユレット。その名は我名も同様に慕しく思つてゐる。まあ我慢し玉へ！

マアキユ。おゝ手ぬるい不面目な卑劣な降参だ！此上は劔にあるのみだ。チツバルト
イヤ猫まため。行かぬか。

チツバルト。何か俺に用があるのか。

マアキユ。猫王殿はこまたどの、九つあるといふおまへの命の一つだけ貰ふ積りだが、次第によつては残る八つも粉微塵こなかじんにするかもしれない。速くしろ！抜かないと俺の劔が耳元へお見舞ひ申すぞ。

チツバルト。よし来た。(劔を抜く)

ロミオ。マアキユシオ君、まあ〜劔を收め給へ。

マアキユ。さあ来い。突くぞ。(兩人闘ふ)

ロミオ。抜けベンヴオリオ二人の劔を叩き落せ。おい〜恥だ。亂暴はよせよ。チツバルト。マアキユシオ。ゼロナの街で争闘をしてはならぬと領主が厳しく禁じてあるぢやないか。またチツバルト。マアキユシオ。

(チツバルトはロミオの腕の下でマアキユシオを突く。さうして従者と共に逃る)

マアキユ。害やられた。兩家の奴等め。やられたぞ。行つちまつたか。彼奴あいつは無傷で。ベンヴ。やられたな。

マアキユ。うむ〜引掻かれた。大丈夫十分だ。俺の扈童こしやうはどこにゐる。畜生。早く醫者をよんで来い。

ロミオ。氣を確かにしろ。傷は決して重くはないぞ。

マアキユ。さうだ。井戸程深くもなければ、教會の扉程廣くもない。が十分役には立つ、明日訪ねて来て呉れ、俺は墓の中から御挨拶だ。俺の總勘定も済んで終つた。畜生、兩家の奴等め。犬、鼠、鼯鼠、猫、人間を引掻き殺しやがる。法螺吹き、

四十五

破落戸、悪黨。何だつておまへは真中へ飛び込んだんだ。おまへの腕の下でやられたんだぜ。

ロミオ。悪意はなかつたのだよ。

マアキユ。ベンヴオリオ。どこかの家へ連れて行つて呉れ。でないと卒倒しさうだ。

畜生、兩家の奴等！とう／＼俺を蛆蟲の餌食にしやがつたな。參つた。しつかり參つた。兩家の奴等！

(マアキユシオとベンヴオリオと退場)

ロミオ。親友のマアキユシオは俺のためにあのやうな深手を負ひ、俺はまた鳥渡の間親戚になつたあのチツバルトの爲に名を汚した。おゝジュリエット。おまへの美しさは俺を女々しくして、吾が心中の勇氣の鋼鐵を軟らげたぞ！

(ベンヴオリオ再び入り来る)

ベンヴ。おゝロミオ／＼。マアキユシオは死んで了つた。あの勇敢な魂は去つて了つた。

ロミオ。今日の日の暗い運命は又の日に續くであらう。これはほんの最初で、別な結

末が又來さうだ。

ベンヴ。やあ我武者羅なチツバルトが又來たぞ。

ロミオ。無事で勝誇つてか！マアキユシオは殺されたのに！もうかうなつたら禮儀も寛大も天外に投げすてた。火の眼をもつた忿怒よ、俺を導いてくれ。

(チツバルト再び入り來たる)

さあチツバルト。さつき呉た悪名を今返す、さあ受取れ。マアキユシオの魂は伴の來るのを待つてゐるんだ。おまへか俺か乃至は二人ともかどうしても伴になるべきだぞ。

チツバルト。青二才め、こゝへ伴れ立つて來たからは、あの世へも一緒に行け！

ロミオ。それは劍が定めて呉るさ。

(兩人闘ふチツバルト倒る)

ベンヴェ。ロミオ。速く速く逃げろ。市民がやつて来る。チツバルトは死んだ。ぼんやり立つてゐるな。捕へられたら、領主はおまへを死罪に宣告するだらう。だから逃げろ、速く。

ロミオ。あゝ俺は全く運命の翻弄物だ。

ベンヴェオリオ。何だつてつゝ立つてるんだ。

(ロミオ去る。市民の聲聞え来る)

第二幕

第二場、キヤピユレット家の庭園

(ジュリエット入り来る)

ジュリエット。駆けよ速う！火の脚の若駒よ、西へ〜と鞭を當てよ、直ぐにも夜を連れておいで。戀を助くる夜よ。やさしいなつかしい夜よ、おまへの翼に載せて雪よりも白い私のロミオをつれておいで……あゝ、あゝ。なつかしい待間の一時は長い〜十年と同じやうだ。おゝ乳母が……ロミオからの消息を持つ

て来たに違ひない。

(乳母入り来る。繩を携ふ。)

まゝ乳母や。どんなお消息しらせ？持つてるのは何？ロミオさまがお渡しになつた繩かえ。

乳母。えゝえゝ、繩です。〜〜(と繩を投げ出す)

ジュリエット。あゝまゝ、どうしたの。何んでそんなに手を振絞るの。

乳母。あ、何といふ目でせう。あの人はお死になすつた、お死なすつた。もう駄目ですよ、お嬢様、もうだめですよ。何と云ふ惡るい日でせう。あの人は行つてお了ひなすつた。殺されなすつた。おなくなりなすつた。

ジュリエット。あゝそれ程に天は無慈悲か。

乳母。天はどうあらうとロミオが無慈悲ぢや。おゝロミオですよロミオですよ。誰が考へられるだらう。ロミオがあんな！

ジュリエット。何んでそんなにわたしに氣を揉ますの。そんな怖しい聲は地獄でなく

ちや聞かれないのに。ロミオが自害でもなすつたのかい。たゞ返事をして御覽その返事一言が悲しい憂目を見せる、そんな羽目となつたら妾の身はもう駄目だ。ほんとお亡くなりなすつたのなら『あい』とお云ひ。その短かい一言で此身の生死が決まるのだから。

乳母。私は其傷を見ました。此目で見ました……おと神様……ちやうど其立派な胸元に。無慚な死骸となつて血みどろな死骸となつて。灰のやうに青白く、血にまみれて、血がこびりついて。わたしは見たばかりで氣を失つて了ひました。ジュリエット。おと裂けておくれ、この胸よ！破れ果てた不幸な心よ、一思ひに裂けておくれ。目も此上は牢に入れ！自由を見るな！汚らはしい塵芥、元の大地へ還つて了ひ、生きてゐるには及ばない。ロミオと一緒に重い柩の積荷となれ！

乳母。おとチツバルトさま、チツバルトさま。此上もない頼もしいおかただつた！禮儀正しい立派な紳士だつた。あなたの亡くなるのを生きてゐて見ようとは！

ジュリエット。えと、何？どうしたの？ロミオが殺されてそしてチツバルトもおなくなりなすつた？わたしの大事な従弟と尙ほ大事なロミオも。もしさうならば世はもう終りだ。あの二人が居なくては生きてゐる甲斐はない。

乳母。チツバルトがおなくなりで、ロミオは追放です。ロミオが殺したのですそれで追放にされたのですよ。

ジュリエット。おとあのロミオの手でチツバルトを……。

乳母。さうです、さうです。ほんとおとさうですよ。

ジュリエット。おと花のやうな顔に潜む蛇のやうな心！あんな綺麗な洞穴にも毒龍が棲んでゐたかしら。おとあんな華麗な宮殿にあの偽はりが棲まうとは！

乳母。だから男は頼みになりません、信じられません。正直もありません。みんな嘘つきみんな騙り、みんな誓言破りです。あゝどこにわたしの下男はゐるの。火酒を持つて來な。此苦し、此の嘆き、此の悲しみで白髪が増えるやうだよ。ほんにロミオめが恥を掻けばいよ！

ジュリエット。をそんなことを云ふおまへの舌こそ腐るがいく、あの方は恥をかくやうな身分か、あゝ假りにもあの方を悪く云ふとは。わたしは何んだらう。

乳母。あなたは従弟を殺したあの人をよく仰有るつもりですか。

ジュリエット。夫だもの悪く云へる筈がない。おゝロミオなせわたくしの従弟を殺したんです。でもさうしなければ悪い従弟がおまへを殺したのだらうから、みんな嬉しい事ばかりなのに、何だつてわたしは泣くのだらう。ロミオ追放！追放と聞く上は両親もチツバルトもロミオもジュリエットも皆んな／＼殺されて了つたのだ。言葉では云ひもつくされぬ不俤だ。これお父様やお母様はどこにおいでだえ。

乳母。チツバルトさまの死骸にとりついて泣き悲しんでおいでとございます。

ジュリエット。涙で傷口を洗ふがいく。その涙が乾く時分にはロミオの追放を嘆く妾の涙も乾くだらうから。その繩を拾つてお呉れ。可哀さうな繩！おまへはだまされたのだ。おまへもわたしも。ロミオが追放されたによつて私は處女のまゝ

で世を去るのだ。

乳母。お房へ早くおいでなさいませ。わたしはあなたを慰さめるためにロミオさんを探して参りませう。どこにゐるかよく存じて居ります。まあお嬢さん。ロミオ

さまはきつと今夜こゝへ参りますよ。私はあの方のところへ行つて來ませう。

あの方はローレンス法師のお房にかくれておゐるのでございますよ。

ジュリエット。おゝ早く見附けて！この指輪をわたしのほんとの騎士にあげてお呉れそして最後の訣別に來るやうに傳へてお呉れ。(兩人退場)。

第二幕

第三場 ローレンス法師の庵室。

(ローレンス法師入り來る。)

法師。ロミオよ、出て來なさい。出て來なさい。人目を恐れ憚る男、おゝおまへは不俤に見込まれて禍と縁組して終つたのだ。

(ロミオ入り來る。)

ロミオ。師父よどんな音信です。領主は何と仰せられた。ままだんな不幸が私と知り合ひになつたんです。

法師。然ういふ不倖とおまへは餘り親しみ過ぎるやうだ。わしは領主の宣告を知らせに來たのだよ。

ロミオ。死罪でせう。屹度。

法師。いや寛大な宣告をお下しなされた。死罪ではない。追放だ。

ロミオ。なに追放！お慈悲です、死罪だと云つて下さい。追放といふのは死ぬより怖ろしい。追放と云つて下さいますな。

法師。いや、エローナからは追放されたが世界は廣い。まあ／＼落付きなさい。

ロミオ。エローナの市を離れて世界はない。あるものは只煉獄です、苛責です。眞の地獄です。こゝを追はれるのは世界を追はれるも同じこと、世界を追はれて死ぬより外ありません。だから追放と云ふのは死罪の別名です。死罪のことを追放と云ふのは黄金の斧で私の首を刎ね乍ら、お前は幸福だと笑つてゐるやうな

ものです。

法師。おゝ深い罪！無作法なる恩知らず！おまへの罪過は國法では死罪とある。然るに慈悲深い領主はおまへの肩を持つて國法を度外視し、怖ろしい死罪の名を追放とかへられたのだ。この難有い御慈悲がおまへには解らないのか。

ロミオ。いえ／＼それは慈悲でなく苛責です。ジュリエットが居る此處は天國です。此處に住む限りの猫も犬も鼠も、どんなつまらぬ者でも此天國に住んで、ジュリエットの顔を見ることが出来ます。併しロミオには出来ないのです。腐れ肉に集る蒼蠅だつてロミオよりは幸福者です。彼等はジュリエットの白玉のやうな手を掴むこともできれば、いつも純な淑やかさで、唇同志が接吻するのさへ罪だと思つて眞紅になつてゐるあの美しい唇から、永久の祝福を盗みとる事もできるのです。けれどそれがロミオには出来ません。私は追放の身の上です。蠅でさへ出来ることがこのロミオには出来ません。蟲けらでも自由です。けれど私は追放されました。それでもあなたは追放を死罪だとは仰有らないですか

毒薬はないか。磨ぎ澄ました刀はないか。どんなに惨憺でも構はない、一思ひに死ぬ工夫はないか。追放！追放で殺されるのはおれはいやだ。あゝ法師、追放とは呪はれた者に用ひる地獄の言葉だ。そんな言葉を聞かせて私を切りさいなむのは、酷いことです、つれない事です、それでも高僧ですか、司悔僧ですか、莫逆と誓つた親友ですか。

法師。まあ／＼さう狂人染みないで、一言私の言ふことをお聞き。

ロミオ。又追放つて仰有るのでせう。

法師。いやその言葉を防ぎ鎧をやらうといふのだ。『逆境の甘い乳』といふ哲學こそ一人の心の慰さめ草だ。よしや追放の身とならと……。

ロミオ。そらまた追放だ。哲學なんぞ腐つちまへ！哲學でジュリエットが出来、市を移し、領主の宣告をかへられれば兎に角、哲學が何のたしになる。何になるんです。もう何も聴きません。

法師。おゝ、では狂人には耳が無いんだな。

ロミオ。無い譯です。賢い人にさへ眼がないんだから。

法師。おまへの身の上に就いて少し談じたいのだが。

ロミオ。感じておもないことをお話しなさることはできませんまい。あなたが私位若くて、ジュリエットが戀人で、結婚してから一時間と過ぎぬ間にチツバルトを殺して、私のやうに戀焦れ私のやうに追放されたとしても言ふんなら話をする事も出来ようし、頭髮をかきむしつて、丁度此やうに地上に倒れて、まだ堀らぬ墓穴を測ることも出来るでせうが……。

(戸を叩く音が奥で聞こへる)。

法師。起きな。誰か戸を叩いてゐる。ロミオや身をおかくし。

ロミオ。匿れるのはいやです。心の腦みの嘆息が、霧のやうに私を追手の眼から匿すのなら兎に角……。

(戸を叩く音)

法師。あれ、あんなに叩いてゐる。どなたですか。さあ／＼起きた。捕へられるぞ。

しばらくお待ち下さい。さあ立つた。わしの書齋へ行つてゐるんだ。只今々々。ほんとに何といふ馬鹿者だ。はいく／＼只今参ります。

(戸を叩く音)

法師。激しくお叩きなされるのはどなたです。どこからおいでです。どんな御用です。

乳母。(奥で)入つてから申し上げます。ジュリエットさまからでございます。

法師。それは、ようこそ(乳母入り来る)

乳母。おゝ法師様、どこにお嬢様の旦那様はおゐでなさいます。ロミオさまはどこでございます。

法師。その大地に伏してゐる、自分の涙に酔つてゐるのだ。

乳母。おゝお嬢様もちやうど此の通りでございます。おゝ何といふ可哀さうな有様でせう。丁度此通りお嬢様も突伏して、嘔りあげては泣き、泣いては嘔り上げておいでです。さあ／＼お起きなさいましよ。あなたも男ぢやありませんかね。ジュリエットさまのために、あの方のために起きてお立ちなさいまし。なんでそ

んなに嘆くのです。なんでそんなに大仰に？

ロミオ。おゝ乳母。

乳母。あゝもし、これさ申し、死ねば何も斯もおしまひですよ。

ロミオ。今ジュリエットと云つたね。嬢さんはどうしてゐる。彼女は私を人殺したと思つてゐないかい。どこにゐる。どうしてゐる。我々の誓ひを何と云つてゐる。

乳母。いゝ何んにも云はず泣いてゐます。床に倒れたかと思ふと立上つてチツパルトと呼びなされる。かと思ふとロミオと叫んで、又横倒しにおなりなされる。

ロミオ。では其ロミオといふ名に脅かされて、その名の主が大切の従弟を殺したから。おゝ法師よ、教へて下さい。此肉體のどんな所に私の悪名が宿つてゐるのでせう。さ、教へて下さい。私は其憎い處を引裂いてくれよう。(と劍を抜く)。

法師。ま、滅相なことをするな。これ男ではないか。姿こそ男だが、其涙はまるで女だおまへが狂氣めいた振舞は理性のない獸同然。俺は呆れ返つて了つた。わしは神かけておまへの性質はもつとよく修養されてゐたと思つてゐた。おまへ

はチツバルトを殺して、其上自分をも殺さうと云ふのか。自ら陸地獄の罪を犯してお前故に生きてゐるあのジュリエットをも殺さうと云ふのか。何でおまへは生を呪ひ、天を地を呪ふのだ。馬鹿な、馬鹿な！さあしつかりなさい！おまへがさつきまで死ぬほど戀ふてゐたジュリエットは生きてゐる。それが第一におまへの幸福ぢやないか。殺されたんぢやなくて、おまへがチツバルトを殺したそれもおまへの幸福だ。次に死罪ともなる可きはづの國法が味方となつて、追放で事済みになつた、それもまたお前の幸福だ。それになんだ意地くねの曲つた小娘のやうに、唇を尖らして運命を呪ひ戀を呪ふ。そんな人間はよく淺間しい死様をするものだから呉々も氣をつけるのだぞ。さあ豫定通り戀人の處へ行つて、速く慰さめてやるがいと。だが夜番の置かれるまで居てはいけませんぞ。ぐづぐづして居てはマンチュアへ行かれなくなるからな。そこにおまへが蟄居してゐれば、いつかおまへの結婚を披露し、兩家のものを仲裁し、領主に赦免を請うて、今の悲しみに數萬倍する喜びを持つて迎へる機會もあらう。さあ先へお

いで乳母どの。嬢さんに宜しく云つておくれ。ロミオも戀て後から行く。

乳母。はれま、結構な御教訓。あのロミオ様。あなたが行らつしやると嬢様に申しますよ。

ロミオ。さう云つて、戀人に叱る用意をさせてお呉れ。

乳母。この指輪はあなたに上げるやうに云ひ附かつたのですよ。まあ早くおいでなさいませ、夜も大へん更けました。

ロミオ。これですつかり慰さめを取り返した。

法師。では行くがいと。左様なら。そしておまへの幸運はすべて此一つにかゝる。夜番の置かれぬ中に出發するか、さもなければ夜明ごろ姿をやつしてこの市を去るか二つに一つだ。マンチュアに匿れてゐなさい。忠實な下男を探して時々其男に此處で起つたいと知らせを傳へさせよう。さあ握手だ。夜も更けたから是れでお別れだ。左様なら。

ロミオ。此上もない歡樂が私を呼ぶのでなかつたから、かうも慌ただしく別れるのは

悲しい事であらうに。では御機嫌よう。(退場)

六十二

第二幕

第四場 キャピュレット家の露臺

(ロミオとジュリエット階上の窓口に現はれる)

ジュリエット。もう去らつしやの。まだ夜が明けもしないのに。あなたの恐がつてお
ゐでなのは雲雀ではなくて夜鶯であつたでせうに。ねえ、今のはきつと夜鶯で
すよ。

ロミオ。いや／＼曉を知らせる雲雀だ。夜鶯なものか。御覽、夜の燭は燃え果て、嬉
しさうな旦が霧の罩めた山々の頂に足を爪立ててゐる。此身は立去れば生きの
びるが、停まれば死ななくちやならない。

ジュリエット。あの光は朝ぢやない。いえ／＼朝日ではありません。今夜あなたのだ
めにマンチュアへの道しるべする流星です。ですからまだ往らつしやるには及
びませんわ。

ロミオ。捕へられても、死罪にされてもかまはない。おまへが望みならそれで満足す
る。大空高く鳴り響くあの調も雲雀の聲でないと云はう。行きたいよりも此處
に居たいが幾層倍だ。さあ死よ、來れ、歎んで迎へよう。ジュリエットが望み
だ。どうしたのだ、戀人よ。話さうちやないか。まだ朝ではない。

ジュリエット。いえ／＼朝です／＼。速くおいでなさい早く／＼。あのけたたましい
噪がしさに調子外れに啼き立てるのはあれは雲雀です。おゝ、もう去らつしや
い。だん／＼明るくなつて來ます。

ロミオ。明るくなればなるほど暗くなるのは二人の身の上だ。

(乳母、房に入り來る)

乳母。嬢様。

ジュリエット。乳母かえ。

乳母。お母様が今お室へおいでですよ。もう夜明けでございます。氣をおつけなさい
ましよ。(退場)

六十三

ジュリエット。そんなら窓よ、日を内へ、命を外へ。

ロミオ。では左様なら。これを名残に——下りて行かう。

(ロミオ下へ降る)

ジュリエット。あゝあなたもう往らつしやるの。おゝロミオ！ロミオ！きつと毎日お便りを下さい。

ロミオ。左様なら。假初にも機會さへあらば音便を忘ることではない。

ジュリエット。おゝ、また逢はれませうか。

ロミオ。云ふ迄もない、此悲しみをやがて將來の楽しい昔語りとなるのだ。

ジュリエット。おゝどう爲やう！下にいらつしやるのを此處から見るとどうやら墓の底の死人のやうだ。私の目のせゐかあなたのお顔が蒼く見るえ。

ロミオ。ほんとうに僕の眼にもおまへの面がさう見えるんだ。互ひの悲愁が生きた血潮をからしたのだよ。ぢや左様なら。左様なら。

(ロミオ入る)

ジュリエット。おゝ運命よ運命よ。人はおまへを浮氣者だと云ふが、それならあの人を直ぐ飽きて妾へ返して呉れよばいよに。

キャピユ夫人。(内にて)嬢や、起きてゐますか。

ジュリエット。呼ぶのは誰れ。お母様かしら。遅くまで起きていらしたのかしら、一體どうしてこゝへおいでになつたらう。

(キャピユレット夫人入り来る)

キャピユ夫人。まあどうおしだえ。ジュリエット。

ジュリエット。どうも氣分が悪うございます。

キャピユ夫人。いつまでもチツバルトの死んだのを泣いてるんだね。これの、おまへの涙で生かす事は出来まいからもうお止め。悲しみは愛の深いしるしだけれど餘り深く悲しむのは分別の足りないしるしなんだよ。

ジュリエット。でも此のやうな不倖にはさんざ泣かして下さい。

キャピユ夫人。いくら泣いたつて、泣かれる人が歸つて來ない。

ジュリエット。返らないとは知つても、泣かないぢや居られません。

キャピユ夫人。ぢやおまへ殺した當の悪黨がまだ生き残つてるのを左程に思はないんだね。

ジュリエット。え、悪黨？

キャピユ夫人。あの悪黨のロミオさ。

ジュリエット。(傍白)悪黨とあの方とは大した違ひだ。神様許して下さい。わたしは心から許しました。と云つても思ひ出すと悲しくてなりません。

キャピユ夫人。それといふのもあの二た心の下手人めが生きてゐるからなのだよ。

ジュリエット。え、さうです。私のこの手が届かない遠い處に。あゝわたし只つた一人きりで從弟の讐がとりたいたい。

キャピユ夫人。心配おしでない、きつと讐はとつてあげるから、だから。もうお泣きでない。さうすればおまへも満足するだらうね。

ジュリエット。ほんとにロミオの顔を、死顔を見るまでは從弟の爲に嘆かすには居ら

れません。おゝあいつの名を聞いてさへ身が顫へる。あの人を殺したあいつの體をひさちぎつて、懐しい從弟に對する愛を見せる事ができないんでせうかねえ。

キャピユ夫人。方法はおまへが工夫なさい。それはさうと、おまへに目出度い事を知らせてあげるよ。

ジュリエット。こんな悲しい時分に目出度い事とは、どんな事ですの。

キャピユ夫人。ほんとにおまへは慈悲深いお父様を持つておいでだよ。お父様はね、

お前の愁嘆を忘れさせようと、急に目出度い目をお定めなすつた。私もおまへもついで待ちもうけなかつた目出度い目を。

ジュリエット。お母様、一體それはどんな事ですの。

キャピユ夫人。あのねえ、今度の木曜日の朝早く、あの華奢なお若いパリス伯爵が、

聖ビーターの會堂で目出度くおまへと華燭の典を擧げるのだよ。

ジュリエット。その聖ビーターの會堂かけて何んでそれが目出度からう。妾は嫁入な

んぞ爲ませんわ。何といふ急なことです。まだ婚約の申入れもない中に結婚なんて厭ですわ。どうぞお父様に申し上げて下さい。わたしは婚禮は致しません嫁入するなら私は何うしてもロミオの處へゆきます。憎いと思ふあのロミオへ。パリス様へ行くよりは一層其方がいく位です。まあ、ほんとに思ひかけない。キヤビユ夫人。あゝ、お父様がおいでなすつた。自分でお父様にお話しなさい。そしてそれを聞いて何とお思ひだかお聞き。

(キヤビユレット乳母と入り来る)

キヤビユレット。日が沈むとあたりが露けくなるものだが、甥の日暮には雨がさめざめと降つて居るな。どうした。え、どうだ。これにあの事を云つて聞かせたかな。

キヤビユ夫人。えゝ申しました。けれどもいやだ、難有迷惑だと申します。阿呆者はお墓へでも嫁に行くのが一番ようございます。

キヤビユレット。まあ静かに。どういふのだ。なに。厭だ？有難くない？名譽だとも

思はない？幸福だとも思はないんだ。自分に價值もない癖に、吾々が分に越えた紳士を婿に選んでやつたのに。

ジュリエット。名譽だとは思ひませんが、有難いとは思つて居ります。嫌なものを名譽とする事はできません。けれども嫌なものでも私を愛して下さいからだと思へば嬉しうございます。

キヤビユレット。何だと何だと、小理窟屋が。何だそれは？『名譽だ』『難有いと思ひます』『難有く思ひません。』それで尙『名譽とは思ひません』だと。我儘娘、もう俺に感謝することもいらんし、誇ることもしなくていいが、次の木曜日までにはパリス様と一緒に聖ビーターの會堂へゆくやうによくその上等な足の關節を調べて置きな。でないと簧の子の上に叩き伏せて引摺つて行くぞ死にぞこなひ！やくざ女！

キヤビユ夫人。まあ、あなた氣でもお違ひなすつて。ジュリエット。お父様、私跪いてお願い爲ます。たつた一言勸忍して聞いて下さい。

キャビユレット。死んで了へ。やくざ女め。云ふことも聞かないで！俺がおまへに云つた事はな、木曜日に教會へゆくのだ。でなければ以後此顔を見るな。云ふな答へるな。返事をするな。えゝこの指がむづ／＼する。これよ、子供がこれ一人しかないのを不足に思つた時、もないではなかつたが、今となつては娘一人すら禍だ。このはした女め。

乳母。まあお可哀さうに。そんなにお叱りになつては旦那様却つて非道でございませう。悪いことは申しません。

キャビユレット。さあ勝手にするがいろ。

キャビユ夫人。あなたは餘り激して在らつしやいますよ。

キャビユレット。さうだ。狂氣にもなるだらうよ。晝も夜も、季も節も、働がうが休まうが、一人で居ようが多勢で居ようが、俺はいつも娘の對手に氣を配つておつたのだ。そして今こそ門閥の貴い、いゝ邸のある、若い教育の立派な、どこからどこまで理想通りの婿をきめれば幸福の優しさにつけ上つて、『婚禮はしな

い』の、『戀は知らぬ』の『若すぎる』の『ゆるして呉れ』の云ひおつて。だが嫁にゆかないと云ふなら許してもやらう。飢死をしようをどうしやうと勝手だ。俺は神かけて我子とも思はなければ、俺のものなら何一つたりとも呉れてやらぬぞいゝか二言はないぞ。俺は誓ひを破りはしないぞ。

(キャビユレット退場)

ジュリエット。おゝ母様、わたしを見棄てて下さいますな。この結婚をせめて一月なり、一週間なり、延ばして下さい。でなければ婚禮の床をチップパルトが臥てるあの薄暗い廟の中に設けて下さい。

キャビユ夫人。私にも何もお云ひでないよ。わたしも何んにも云ひますまい、好きにおし。もうおまへには關はないから。

(キャビユレット夫人退場)

ジュリエット。あゝ神様。おゝ乳母や。どうしたらいゝだらう。慰さめておくれ。教えてお呉れ。あゝほんとにわたしのやうな繊弱いものを、天まで責め苛む。何

か云つてお呉れ。乳母や。嬉しいことを——何ぞ慰めの一言を——。

乳母。えと申しますとも。ロミオさまは追放されて、全世界が無に還らうと、再び歸つてあなたに何のかのと云ふ事はありません。よし歸つたにしてもお忍びでなくちやなりません。だから今のやうな事情なら、あの伯爵と御結婚なさるのがよい分別ですよ。あの方に比べるとロミオは雑巾です。鶯だつてパリスさまのやうな美しい眼を持つてゐませんよ。ほんとに此度の御結婚であなたは幸福におなりなさいますよ。よしさうでないにしろ前のはもう駄目ですよ。いえ駄目も同じでせうよ。死ななくても自由にはならない身の上ですもの。

ジュリエット。それはおまへ本心ほんしんから云ふのかえ。

乳母。本心からでなくてどうしませう。さうでなければ罰が當つてもようございませう。

ジュリエット。さうとも。

乳母。何ですつて。

ジュリエット。いゝえおまへはほんとうによくわたしを慰めてお呉れだよ。さお這入りそしてお母様に云つてお呉れ。わたしはお父様の御不興を受けたから、懺悔して罪を許して貰ふ爲めにローレンス法師の庵室へ往つたと。

乳母。はい、申し上げます。それが賢いことでございますよ。(退場)

ジュリエット。罰あたりめ。おと夜叉の悪魔め！わたしに誓を破らせようとしたばかりか、前には幾千度も比べ物のないやうに賞めちぎつたわたしの夫を同じ舌で悪口するとは、相談對手ももうおやめた。おまへとわたしの心はもう別々だよ。さあ、わたしは法師の處へ行つて救つて貰はう。事がみんな破れても、まだ死ぬ力丈けはわたしにあるのだ。(退場)

第三幕

第一場 エローナ。ローレンス法師の庵室。

(ローレンス法師とパリス入り来る)

法師。木曜日ですか。それは又急ですな。

パリス。舅のキャピユレットさまがさうしたいと仰有るのです。私もそれを遅くしたいと夢さら思ひません。

法師。あなたは未だ令嬢の心を知らないと仰有る。されば未だ筋道が順當でない、わしにはそれが好ましくありません。

パリス。令嬢はたいへんチツパルトの死を歎いておいででしたから、私も涙の家にはウエナスも笑はぬものと、縁談を控へて居た處お父様のお考へなさるには、あゝ激しく悲歎の涙に暮れさせるのは危険だ。其悲歎を慰さめるためには結婚を急いだ方がいゝ。と仰有るので急に事が決まりました。さあこれで理由がおわかりでせうな。

法師。(傍白)それを遅くしなくちやならぬ理由を俺が知つて居なければなあ。ああ御覧なさい。嬢さんがこの室においでなのやうだ。

(ジュリエット登場)

パリス。いゝ處で會ひましたね。私の奥さん。

ジュリエット。わたしが奥さんになつたらさう仰つてもようございますけれどねえ。

パリス。なるのですとも。此の次の木曜日には。

ジュリエット。さうなると決つた事ならなうでせうよ。

法師。なるほどこれは理窟だ。

パリス。神父さまに懺悔をするので來たのですか？

ジュリエット。其お返辭とすれば、あなたへ懺悔をすることにもなりません。

パリス。あなたがわたしを愛してる事は隠さず神父様に仰有つて下さい。

ジュリエット。神父様を愛してゐることはあなたにも隠さず申しますわ。

パリス。それと同じくわたしを愛してゐると云つて下さるでせうね。

ジュリエット。然う云ふにしろ、背を向けて云つた方が面と向つて云ふより價値があるでせうよ。

パリス。可哀さうに、あなたの顔は涙で汚れてゐますよ。

ジュリエット。涙がどれ程の事をしませう。汚れぬ前から私はきたないんですもの。

パリス。そう自ら誣るのは涙で汚すより猶ほわるい事です。

ジュリエット。誣るのぢやありません。眞實ですもの。陰口どころかちやんと自分の面に對つて云つたのですよ。

パリス。あなたの顔は私のものなのに、それを悪く云ふんだね。

ジュリエット。さうかもしれないわ、私のものでないのですから。御神父様、今お暇ですの。でなければ夕べの祈禱の時に参りますわ。

法師。いや暇は今でもあるよ、あなた、濟みませぬが私共ばかりにさせて下さい。

パリス。いやどうして勤行の妨げなんぞしませう。ジュリエット木曜日の朝は早く迎へに行きますよ。ぢやそれまで左様なら。此聖い接吻を取つてお置き。(退場)
ジュリエット。おと早く戸を閉めて。そして閉めて了つたらわたしと一緒に泣いて下さい。もう駄目です、駄目です、駄目です。

法師。あゝジュリエット。おまへの悲しみはもう知つてゐるがわしの智慧にもかなはない。わたしはおまへが次の木曜日にはパリス伯爵とどうしても、結婚しなぐち

やならん事を聞いた。

ジュリエット。それを中止させる手段がないなら、聞いたなぞと仰有らないで下さいもしあなたの智慧でも救つて下さる事ができなければ、ただ私がよく決心したとお賞め下さいまし。すれば此懐劍で今すぐに爲負せます。心と心結び合はしたのは神様、手と手を繋いだのは貴方です。あなたがロミオへ封印して下さい此手が、外の證書の封印になつたり、又わたしの眞心が操に背いて他の人に傾いたりする位なら、此短刀で手も心も突殺して了ひます。ですから、あなたの永い年功で即座の智慧をおかし下さい。それが出来なければ此難儀と私の身との争ひに此血腥い短刀で審判するのを見て下さい。そんなに黙つてゐないで、さ何とか云つて下さい。わたしは死にたうございます。あなたの云ひなさる事が何の役にも立たないならば。

法師。まゝお待ちなさい嬢さん。やつと望みの綱を見つけ出した。が、それは脱れようとする事が必死であるだけに、必然極まる所業なのだよ。もしあなたにバ

リス伯と結婚するよりは自殺して了ふといふ程の力がおありなら、此恥辱を避けるために死ぬのにも似た或一つの事を爲負せる事も出来るだらう。恥を免るゝためならば死と争はうといふあなただからな。そしてあなたがやり徹す意があるなら、私は救ふ道を授けてあげよう。

ジュリエット。おと、パリスと結婚する位なら、あの塔の上から跳んで了へと言つて下さい。山賊の跳梁る夜道を行けでなくば蛇のゐる叢へ身を隠せ、吼ゆる荒熊の檻にもつながれ、又はからくくと鳴る骸骨や汚い穢い濁體と匿れてゐよとも云つて下さい。聞いたばかりで身の毛がよだつ恐ろしい事だけれども、操を立てる爲になら躊躇せず致します。

法師。それならばな。今日は先づ家へ歸つて、元氣よくパリス伯との結婚を承知なさい。明日は水曜日だ。明日の夜はどうにかして獨りでお眠みなさるがいい。乳母をおまへの室に寝かしてはいけませんぞ。そして床に就いたら此蠟をとり出して、この薬をお飲みなさい。するとすぐ冷たい眠いやうな心持が血管中に行

き渡り、脈搏もいつもの調子を失つてやがて消え失せ、生きて居ると思はれぬ程に呼吸も止り、體温は無くなる。唇や頬の薔薇色は褪せて青白い灰色とかかり、眼の窓は生命の日が暮れ果てた時のやうに閉じてどこも固くなり、硬ばり、冷たくなつて死人のやうに見える。さうして死の姿で四十二時間を経れば、快い眠りから醒めるやうに起き上がるのだ。で、朝になつて花婿殿が起しに来る時分はおまへは丁度死である。すると此國の慣習として、顔はかくさずに一番いと晴着を着せ、キャビユレット家代々の柩を横へる古い廟に運ばれるだらうその間に、おまへが目醒ます頃になつたら、ロミオに此の謀計を手紙で知らしてそこへ寄越すことにしよう。そしてわしとロミオでおまへの醒めるのを見張つてゐて醒めたら其夜にもマンチュアへ連れて行かせよう。おまへさへ心が變らず、女々しい涙も流さずに、之をやる勇氣があるんなら、きつと今の恥辱から身を免れる事が出来るのだ。

ジュリエット。下さい。下さい。怖れるなどは云つても下さいますな。

法師。ではまあお歸りなさい。十分に覺悟を決めておかかりなさい。わしは急いで僧侶をマンチュアへやり、おまへの夫に手紙を渡させよう。

ジュリエット。戀よ、わたしに力をお呉れ、勇氣さへあれば事は必つと成就する！左様なら、御師父さま。(退場)

第三幕

第二場 ジュリエットの居間

(ジュリエットと乳母と入り来る)

ジュリエット。あゝ、その晴衣が一番いゝわ。それはさうとねえ乳母や。今夜はわたしを獨りで寝かしてお呉れ。おまへも知つてるであらうが、このねじけた罪深いわたしの心を天が赦して笑つて下さるやうに、たんとお祈禱をしなくちやならないのだからね。

(キャビユレット妻入り来る)

キャビユ夫人。どうおしだえ、忙しいのかえ。わたしも手傳つてあげようかしら。

ジュリエット。いえ、お母様。明日の式に必要なものはみんな選んで置きました。

ですからどうぞ私にはおかまひなく、乳母は夜中お使ひ下さい。こんなに急な取込みでは、傭人手が足りないでせうから。

キャビユ夫人。ちやお休み。床に入つて寝るのだよ。おまへにはそれが何より必要なのだから。

(キャビユレット夫人と乳母と去る)

ジュリエット。左様なら——今度は何時會へるのかしら。おゝ總身そんみが寒氣立つて血管中にしみ通る恐ろしさに命を熱も凍えさうな。一そみんな呼び戻して慰さめて貰はうかしら。乳母や。いや乳母が何の役に立たう。怖しいこの一場はどうあつても私一人で演らなくちやならない。さあおいで巖いわよ。もし此の薬が些ちつとも効きがなかつたら、明日の朝婚禮しなくちやならないのか。いや／＼それはこの劔けんがさせない。さあおまへはさうしてそこにおいで。(と短劔を下に置く)もし、これが毒藥だつたら——一旦ロミオと結婚させておいて、今度の婚禮をさ

せる時は、宗門の恥辱となるので、それで私を殺さうといふ深い陰謀の毒薬だつたら……いや／＼そんな事はよもやあるまい。だけれども墓の中でロミオが起しに來ない。神聖な法師でとほつた方だもの。けれども墓の中でロミオが起しに來ない前に目が醒めたらどうだらう。墓の中で息がつまりはしないだらうか。まだ此間埋めた許りのチツバルトも血まみれの墓衣のまゝで腐りかけて居るだらうし、又話しによると夜の幾時間かは幽霊がでるといふ……まあほんとにどうしよう、醒めるのが早すぎて、それを聞くと生きてる人はきつと狂氣になるといふ、あの厭らしい臭ひを嗅ぎ怖ろしい厭なものに取巻かれて、狂氣の餘り先祖の骨を玩具にしたり、傷だらけのチツバルトを墓衣のまゝで引出しはしないだらうか。我と我が手で腦天を打碎くまいか。あゝあれ／＼チツバルトの怨霊が細刃で切られた鬚を討たうとロミオを追ひ廻すのが見えるやうだ。あゝお待ちチツバルト、あッロミオ、私が行く。これはおまへのために飲むのだ。

(ジュリエット床上にて帳の内へ打倒れる)

第三幕

第三場 墓地。キヤビユレット家の園所。

(パリス侍童をつれ、草花と炬火とを持って出て來る)

パリス。さあその炬火を呉れ。それからすつと離れてるんだ。いやそれを消して呉れ人に見られたくないから。そして人が來たら知らせに口笛を吹くのだよ。その花をよこせ。吩咐どほりにするんだ。さあ行け。

侍童。(傍白)こんな墓場にたつた一人で居るのは恐いけれど、まあやつて見ようか。パリス。なつかしい花の戀人よ。私はおまへの新床に花を撒いて……お可哀さうに！天蓋は石や土塊だ……私は夜毎に香水を注いで其花をうるほし、それがつきたなら嘆きに搾る涙の露でうるほしてやらう。わたしがおまへに捧げうる香華は、夜毎にかうして花を撒いて泣くことなのだ。

(持童口笛を吹く)

あゝ小姓めが何か來た知らせをしてゐるな。いま／＼しい何者だらう？や炬火

を持つて来るな。夜よ。しばらく俺をかくして呉れ。

(パリス退く。ロミオとバルセーザア、炬火と鶴嘴とを持つて出で来る。)

ロミオ。其鶴嘴と鐵挺をこつちへ呉れ。さあこの手紙を持つて行つて明日の朝早く父上に届けて呉れ。其明りをよこせ。きつと云つて置くが、どんなものを見ても聞いても、遠く離れてゐて、俺のすることに、妨げをすると承知しないぞ。俺がこの廟中へ下りるのは一つは戀人の顔を見るためだが、それよりも第一に死んだジュリエットの指から貴重な指輪を取りだして、大切な用に使はなくちやならないからなんだ。だからあつちへ行つて居ろ。もしこれから何をするならうなぞと戻つて来て窺ひでもすると、神かけて俺はおまへを八ツ裂きにし、この飢えに墓穴を肥やすぞよ。時刻が時刻だから俺の心は残忍で、饑ゑた虎や吼えたける海よりもつと兇暴になつてゐるぞ。

バルセーザア。はい／＼參ります。決してお妨げは致しません。

ロミオ。それでこそおまへは俺に友愛を示した譯だ。この金を取つて、無事で榮える

がよい。ちや左様なら。

バルセーザア。(傍白)あゝは御仰有るけれど、俺はこゝらあたりに隠れてゐよう。お顔附も氣づかいだし、お心も疑はしいから。(バルセーザア退く)

ロミオ。おのれ、死の淵源。人間無上の食物を貪り食つた憎い胃の腑め！この通りおまへの朽ちたる顎を開いて、否應なしにもつと食物を詰め込んで呉れるぞ。

(廟扉を開く)

パリス。あれは追放になつた高慢なモンタギューだな。吾が戀人の從弟を殺して、その悲しみのために美しい人を死なせた奴だ。今此處へ來たのは死骸に侮辱を加へるためだらう。よし引捕へてやる。(進み出る)やいモンタギュー兇惡な所行をやめろ。怨みを死後まで霽らさうといふのか。呪はれたる惡黨奴捕へて引立てるぞ。尋常に從いて來い。生かしちや置けない奴だ。

ロミオ。生てゐられないからこそ此處へ來たんだ。いやわたしのやうな命知らずの男に手出しをなさるな。速くあつちへお行でなさい。死んだ人達のことを考へれ

ば、怖れるがよい。お願ひだからわたしを憤激させて、またの罪を犯させて下さるな。おと、お行きなさい。神かけて俺はおまへを自分の身よりも可愛がつてゐるんだ。俺は此處へ自分の身を殺すために来たんだからな。さあさ早くお出でなさい。生き永らへて、後で、狂人の情で危ない所を逃れたとお云なさい。

パリス。どんなに頼んだつて駄目だぞ。俺はおまへを重罪人として引捕へるのだ。

ロミオ。俺を怒らせようと云ふんだな。そんなら覺悟しろ。

(二人相闘ふ)

侍童。おとどうしよう闘つてゐる。行つて番卒を呼んで来よう。

(侍童退場)

パリス。あゝ殺られた。(手傷を負ひ倒る)情があるなら、廟を開いてジュリエットと一緒に埋めて呉れ。

(パリス息絶える)

ロミオ。おと承知した(顔を調べて)やあこれやマアキシオの親類、伯爵パリスだ。馬

に乗つて来る途中で家來が何とか言つたつけ、うんさうだ、パリスがジュリエットと婚禮する筈だつたとか云つた。いやさうは云はなかつた。では夢だつたか。今しがたパリスがジュリエットのことを言つたからそれでこんなことを思ふのか。こりや俺の心が狂つたのか。おとパリスおまへの手を取らして呉れ。おまへも俺と同じく薄運の名簿の中に書き並べられた人だ。さあ俺が名譽の墓に埋めてやる。墓だといや墓なものか。明り窓だ。何故といふにジュリエットが横はつてゐて、彼女の美しさは此墓窖を燈光のみちた宴席のやうに輝かしてゐるぢやないか。死人どの、死人の手に埋められて其處に横はるがいく。

(パリスの死骸を廟中に横へる)

人といふものはやゝもすると其死際に心がうき立つ！それを看護人は死ぬ前の電光と呼んでゐる。が、どうして俺はこれを電光と呼ぶことが出来よう。おと戀人よ。妻よ。おまへの胸の蜜を吸ひとつた死神もおまへの艶麗さを奪ふことはなし得なかつた。チツパルト、おまへもその血に染みた布の中に横はつてゐ

るな。おと、おまへのうら若さを眞二つにした此手で當の敵を切り殺すよりもさる追善はあるまい。許して呉れよ從弟。あくなつかしいジュリエット。おまへは何んとして今も斯うは艶麗だ。俺は此處で永遠の眠りに就くのだ。さうして世に倦きはてた肉體から不運の束縛を振落すのだ。眼よ、見ろこれが最後だ。腕よ。抱けい。これが最後だ。(と藥を飲む)おと正直な藥種屋よ。おまへの毒は直ぐ効くわ。かう接吻して俺は死ぬのだ。(死す)

(ローレンス法師、墓所の一方に提燈、鶴嘴、鋤、等を携へて入り来る)

法師。聖者フランシス、どうぞお護り下さいまし。あゝ今夜はわしの年をとつた足が幾度墓石に躓いたか知れない。おとロミオ！私が此慶事のないやうにマンチュアへ使を出したのだが何んで此慶行違ひになつたものか、おやく。何といふ血潮だロミオ！おと眞蒼だ！誰か外に？やあパリス殿まで！しかも紅に染まつて。あゝ、何んといふ無慘な時刻だ、こんな淺ましいことをば一時に仕出かすとは！や、嬢が身動きをする。

(ジュリエット眼を醒ます)

ジュリエット。おと御神父さま、ロミオは何處に居る。わたしは行き所を覚えて居る。

おとさうだ、わたしは其處へ來てゐるのだ。ロミオは何處に？

(奥で人聲がする)

法師。や、人聲が聞こへる。さあ早くそんな死や疫病や不自然な眠りの巢から出ておいでなさい。吾々が手抗ひの出來ぬ大偉力が計畫をすつかり壊して終つた。さあ出て行かう。あなたの良人は死んであなたの胸に臥してゐる。それからパリス殿もだ。わしは神聖な尼僧の仲間にあなたを入れてあげる。番卒が来るやうだから委細は後にして。停つてゐちやいけない。さ行かうジュリエット(再び人聲)わしはもう躊躇しちやいられない。さ、早く、早く。

ジュリエット。ちやおいでなさい、——わたしは行かない。

(ローレンス法師去る)

これはなに？戀人の手に握つてゐるのは盃か。あゝ毒を飲んで非業の最期をな

されたのだな。まあ情ない。すっかり飲んで終つて、わたしのためには一滴も残しておいて下さらないのだから、わたしはおまへの唇を吸ひますよ。もし少しでも毒が残つてゐたなら、その妙薬で死にもしよう。(接吻する)まだ唇が
温い!

番卒。(奥にて)先に立て。どつちだく。

(騒ぐ聲聞ゆ)

ジュリエット。や、人聲!おとすこしも速く。——この短剣で!.....

(ロミオの短剣を奪ひ胸を貫く)

斯うしてわたしを死なしてお呉れ。

(ロミオの上に折重なつて息絶える)

——幕——

大正七年十一月二十五日印刷
大正七年十一月二十九日發行

發行 兼 編輯 者

豊多摩郡原宿三百六十八番地

林 和

印刷 者

日本橋區兜町二番地

神 谷 岩 次 郎

印刷 所

日本橋區兜町二番地

東京印刷株式會社

發行 所

本郷區湯島切通坂町二十五番地

畫 報 社

377

117

終